新板
繪入

加古川本朝綱目

四之巻

1608
4

1608
4

加古川本竹綱目

河市

拙作育後編
教例紙求質
日の晩

目録

第一　二小猪と石あり大黒丸出し雷
あその樋乃妻あり鳥子の音猪
神罰よりどけて遊び居と猪猟
還俗の仲小指切さず神霊の授乃

加古川本竹綱目　巻六　三

第二 松風も寄とてつどくに筆を付さお勤
那智黒の石もむるてわるしぎ松
居付ぬ手代は秋とゐる心の新被買
色ハかハらぬ野郎帽子ハ薬種の進物

第三 男ハ勝女一疋獅子風俗こそ実情こゝろ
浄瑠璃は添ふ縁もそれら出来別の路
三とせハ家ふ女の念力通るけし寄麗好
蝶よおもぬ勝負の修了ハ請負の精

一 二子揃ふて出世の大黒虫出し雷

からを身に見て寄て詐偽伝の三寸も己が身の行に好む時ハ我ホたつ人とも気儘十六
引手そそも小そ若の家に入る人々名やすさんとても非を若の珠数ござ候儒者の弊
なり通勤も世間定まりとりある時ハ身ホそ八百屋通主之行料などの紳学をも
ぬきのハ茶方に探るそこ剣よりて他くす方通まこと無理よ好む人と押て勤る時ハ枝
めて理末之位ふる程よ寄て老若とも身ホの組へも入ぜらとでさへれぬる大坂町
家之よ住来商人大坂屋之内とて宜敷萬人通りふえせ八河お西川殿の人ゟて
けうら八百屋へ行きひ宿通お武時甲子村月大黒村ゟて大黒の形通石を指掘りてうら記
都のお裁よ小社を建て日々定をる殿宿通おひ由ふや其家も家方とそるとろう
獄突てもよい方よ一子とよけてみやとそ受け家内と計通書子ひとしく
とひて此子は身の上ゟてハしる縁よ家でろうもなくして寿す成れつとして利ふ高ら

ぞこらあるのあさを術よりあるやう育てて変をとゝ付て理をくとゝ弘めれとえう
小兄の時より変えんでゆるどのるのあるべ祝とハ変てゆくのなく付合をてびゝ
ぬるどてて富者よ法をてよ位素濃ハ子よ及ぐ位まゞるもゆうぬうちかゝ茶の
物をり紙俗ゆゞ変西をとる妙むれよ左煙育しやせを付て書くことくむるのの
皆ふ横様ゆてこちのれゆ搗米屋ゞゆうれゆるのとる抽でゆをて言もまゝゝぬうち
かゝ海せてこのいて言の付ゞ二祝の東ハとかゝあをでハ後くよ掃まれぬそあゝ
とよ大正天とゝで行るるよ三夜さゆ付米のの茶ふよ市ゞ老証ハ系の茶よ有
をびゆ茶るこのゆかをとうんてこのねこを和語て祝くのふハ蒲言でもゆ内のりの
けゝをと掃まゆ若もゆくて後けゝをを付てんかくとゆ(て)よ今年十七茶
にをかこりゆ祝よ乃変祝の時よ人の若るでもるく祝よ変有てとる先れね
物るを正ゆゞ三よ信を実ゆゞくくと三言変とふゆゞ変ゆてり不変よ右ひ
新のでハゆけをゞるもと一夜親ゆゝさんとて神あよ行て古茶をとて富とゆ

又三夜をとゝ変ふ者の見ゆ抜めて足る像の西をくとて怪ひ頂りあくゆりのもゆ
あくゞを米を時よ飯出て三茶三ゆれ実付なゞ三ゞれ実付なゞ三ゞれ実付なゞ三ゞれ
始しさの飯りよをゆのれかくる者持をゆえゆゞくゝゞゝ三ゆいゆて(も)ゆ
より一ゆよ市ひる像の出もり有とのゆまゞ楽ゞ名ゆゆて(と)三ゆ像実付ん
とて実ゆるゆハ実ゆて(を)でもを像和ひ方て中くゞ付茶よ正利ハ始ゞくゞハ
をゆるゆ西みるをゞ服をの子さふえよゆ者ひよ別ゆる和祝像よ足を抜よ
て術ゆ抜の利をゆるてをゆりめるゞを屋ゆ月もるて不変ゆる和者よ猿さ
ゆ信より小ゆ出濃をを中くゞ搗茶よ巻ひかゞとて巻ひくてゆ内の値茶
ゆとをゆとよ美妙ゆるハ彼よ市ゞ食よゆる和付へゞ付出美ゆる茶をとゆ
美せゞ弱巻のゆ祝ゆくとゆ足を剤をを(と)ゆを甲巻ゆけをゞゆゞみ巻よ
よ市いのやうハゆんでゞ付出茶より付ゆる(ゆ)ゆんやさゆをゞ出ををもやゆり
茶ゞ搗ゆハ勿神をて(ゆ)もいとゞを足を冷くゞふてるとゞ(ゆ)ゞ付月付も巻

大黒天ゑかつげ
ゆふ
又ゑろ勘定ゆふ
ねむる
たりら
ぬろ
こ米
筑紫屋
何門屋
九兵衛
かぶと屋
開石屋

ちちんとんしゃん
八重桜
一つあるん
おやちゲぬむてゑ
ちろと
芳沢
芳次郎

後には太さに痃痛出て頬骨迄が気肉腫て介抱へかゝりく医療尽させども験
なく痛止かくて凡三月痛通て其跡の子孔時にあちらで忽忘まてうごくに痛
止ぬみなりまぬ小に及び皮気肉の腫ひ大さく表が治めしが又常皮膚の後はいら
が悲そろ介らば引本線をのを煉て肌に付ばさあよかりで進めとて其毒に
接び縫ハ入備とゆうの弟子にあて鹿頭をゑく費にかけ流傷は葉門あらで出
竹を塊を立けそ数内皆ハ尤りが育て召うれぬ丹後路にて此夢の袖をもち入
て立に額を親基つまで締めて肝を潰せども三日に目うる癇通に江病寄あげ
くちもよて色すいまよつき日に臓皮足に語出て生巻にこり出
付あまは抜戦癖ですせといさい三十あまの上の死ハ胃ばりよ子喉老やの論り嘆ぐあの
とてもくの孫を求て死屋も出でゐて生々事合に生き代料が三ハ貫七百三十弐文
親又夜のつまく具を出て後の男見も寺気弊風に行せ老衰出は咄しや後か利に
後の後見の流なお弁が眠みちもつさかくつての往人に伝ひ始うまお腰仕習て又茶胡

の神薬も出来候らくで目を覚し利益さんくと喉らかく遊さ疫ちかくてとうとく祝ひも
効あらさらいへ瘡痛ちく患の人へかやうまへなんぞ子細で有んもうは神妙をお丼に
又かるといふ人を頼て見て甚ひぬと合足ハ全く猫の祢の表に皆さる神異ととで覚え
ゆうち其覚へ夫と向ハもて又たち肝を潰しも扨三條仕ますれ私ハ元は内のせわれかて
お奥村の大黒元を祈らせておわれぬに当ますれ祈ハ廉して見せ去るを年秋の比活者を参り
て第三の猪寄ろべし其の義を仰して寒付ますさぶ宇味よう猪なるよさい猿
又常のなんおめて又三の猪業ますされ猪よお物がかられ及寄済て湖始め刹を
後まとて三の猪小殊まての霊夜よ背まして養張ニき按摩第ニ実出座ますさ
猪初よ出が付まていふれよいと陰てもさまをぬ奈是姫か内の飯茶に兌ひ
陥しさがふ容まし悴が様中斗へ生出が入まして卵の君の杭へハ更りませぬかいろ
こうのしなくよ目をさしまさがが悴又常三月がかる大に般を痛んまして悩みます
ろうの大方あらに術ちき苦痛を道取とずるし魂が入まて皆く座中くまふ

合せぬ野ぶ挂び合く私が歎きより大患と名に遠ひまして伯伴が跡で
はござりませぬがいかれよおまたるとも此縁を申しくござりまいたがとし
則もござり〳〵ば表へさう申上て下されいと涙を盈挨拶ての程すに甘口氏も発止
よろしきもぬる経縁操返して考へ見ていまうあれいかの何の身と遠ひ縁の何の縁
アヽ親じんようくて年数年のくばは絶し有ずこられバ理場治組でも指て逝き時を
訪すくそのりおまに住みれも涌しての挨拶よさぐさあれもなく気を悔てぞ返しをしく
云ふまに新鉄也悴がかくろ身持しあれて悴よ流なけまどバ勘当とべさ稽みもあんだ
とて見合せバ先合伐ふ市料とやらと老ひろけ一切括び一両あ方バ貫も多く有田に
風雅と云へとて拙へハ揺若俗大坂かゝあくばよってて一小田原村とよ左名色のちるよ一家が
有て無理やりに始績戻りの弁当で恵よ追やってその道る中彼白髪まみれぬ伯
父坊のいさる且ぁ流涕じておやまるりハ石ひ留つても下地の風雅好の上此縁の保証
入って発家たゞ刹て住也てて二夜ハろけても眼さ限り理菌が示名を発ての悟りどて

がふるていふすゑ足紀と宿へバ酒ととこゝへて吾うけろ伯父の和尚も嬉び何うつぶさに語しても
酒位ひと申るてちくびよまて夜半よ面白くがで伯父坊ぐあらに来てゐて禅るの
ざるんざ左右ハ眠せまいゐと村中がるんのめとひ出して一休和の嫂の坊がつ苦てかう
おへろ西寺此んぐくし此坊を逃きさてのぎるぐとて然て又伯父坊と岳屋を呼で三十
梅のまろ庭い追よ書をさる偽楽て功りまも此程あ坊と無理やりに弁当よ茶て大坂
頭くせそ坐さしく紀仁も考のうも多く久堅久の表へよまいせんとて隠し拾得れたくく
て住所ハ揺若屋ハ住也でで返しさ兎角息子よハ不自由とさんが身の方がよくら
づいて北殿のる暗唐りて弟子まで目付ある抱者かる剥深の婆あを麻て付て、座
さが勝手やし此號も耶示かて随て此日計ハ軽ましさしと家をるさうかなぃ又化堂
弟りみかこうけて出て餅ての表御り徐の淋しさよのつの縁ろ禄縁いさいつもと家ぐ
時お良と局根情弱ちかうるお鬼後と呼寄で又持病が刎返て吾略刹深が寺まって
還俗かろいぐくり天窓よ縁いものめちらるとのと縛り付りつさま因果出ろ深

て打解さむとおもふ心の内の大王村の住人の勇士なる者
ぬまりとやハ中仕返されぬ者ども多くいひかゝりての紀伊の国の
とあれてかてゝ切ゝ指ゞ深手を負ふ彼ハ毒場の猪ゝ出て行けゝ
主の神谷も彼大王の姫ゞ春行よ悪心に足を世話せんとて陥穽てる程毒ゞ指切さ
深手彼指の切ゝより抜出ひて逃ゝ市場部屋を肖さ方ゞ犯の者ども今
海ゞ脱ゞ出ゝ家ゝ帰ゝ行ゝ晴て立ちえの中ゝて犯者ゝ小豆ゞ春行
ゝ付添ひ楽ゞ世話ゝ出ゝ出ゝ縁ゝ久つかゝ出ゝて逃ゞ
ゝハ部屋方係ゝ切ゝて抜ハ犯の者ゝ部屋の身ゝ出ゝ初て我ゝ我身
のゝを知て仇ゝ世を思せるゝと思ゝ結さ云ゝても彼女部ハ結せるゝ
ゝハ仇ゝ多ゝ宵ゞ春ゞ者ゝも多ゝ人ゝ犯ゝ足を引れ女を連て逃ゝ行
姫ゝの此紀くゝも捨ゝと打て彼女を足ゝ結て結ゝ姫と抜て中ゝ出ゝ
町住ゝ出ゝ行ゝ足ハ逃ゝ者ゝ共ゝ部屋ゝ出ゝ

深く抜て大王を足を窺ゝ者ゝ共ゝ部屋ゝ出ゝ
の小樽を乗ゝ上ゝ人ゝ抜ゝ出ゝ狼者の小屋ゝ出ゝ
紀の苦我性ゝ逃ひ逃ひて抜ひて小屋ゝ出ゝ
者ゝ傷ゝ女ゝ抜ゝ者ゝ小屋ゝ出ゝ
小樽ゝ乗ゝ出ゝ時目黒ゝ行部ゝ服ゝ抜ゝ
者ゝ保ゝ月下ゝ行て高ひ多ゝ
抜ゝ指むゝ深ゝ切ゝ者ゝ
多ゝ姫ゝ望者ゝ冷ゝ
小せる出ゝ足ゝ
ゝ今ゝ行ゝ
ゝ

二　弟子ども手習ひとて仮名を付さい勧

あんと立川甚三郎ゝ小もたしゝ者ゝ

らこの顔あさましくぬれと向かく北ばい黄色黒くよろこび笑て拙者も古いなるとれども
よい年をしてきれるものをし添ての古名も祝ってあり酒とかいうれば先あ
さまとて遊宝ていつの所足は又借よで高をしの人の手性拙者よく存ぜるの者ぐ
いうれ治はり世の中ってたかは紙よりそは紙中とヤス教色よ徒菊のしし赤漢
反茶たろうとそ干鰯を者ものの人付男の者はのと熊野出者るよ小て付ぬ出ぬ水
うもたろうぐ考くよ石は風雅よくしてを拙ぬを中ってとるふる仙合ぐ男一疋さ
のりくさおも添く鬼の仕ひまてもちんとこのけ存くれ付るぐ右るうき
ば那智山よ親くと考く若時より打ぞ兵衛家よて五七日紙つの逗留小屋を
ようはの引くは智恵色白さお髪下紙拙いまでも色と張ってる男子小て
もこをとを人名女ようは出の時をふくみてあげる事小ぐ付男の病ひるう
流石ぬといくと流石の中おもけ人は指お拙このく女でさくこ十ねよ味ひ源
さおくと陸つのでないう男は拙のよ長のようのまを長の時をとる女よ

我身よ情深くあるお拙いよおくとるおを陸ておをとば皆くさるあ見くとていう
のはようは死十ぬ六の男ぬはのようは野市常中とてもあるとるのを種出くて
行新り新ぬて紙老ぬかても女の時は中くぬまざる男く信でそけれ付の堅さ
いよ海もあくて信者かくいやうて付合ぐる行の一癖そをもよく人よ長く
をそて長名よは右爺くとで味ひれ多をり拙もこ酒足はけ長を五拙の冨るふ
て蘭ひもを長くて法浦くを出をとおはふて入ろう辛ろう旅人多足をおい
ちろくるまを内も大勢場も大くて浦山ざるとのもあろう彼一癖ぐ初一長ふ
て工稲小兵武は姫下女まを多くもはそくて計老く勤るけは出拙よけをでよ代かある
し猪鹿ひさは遊ちくろく紙兵衛打角そこ動ははてえ猿まで仕はくをとぐる
親代行見ろ長友のくでく解りくひ酒をくヤスは紙ぐ拙代の多ぐ浸をる
とや鼠まくを八一を出ぬとをは九鼠天中くあく母ぐまで出ぬよあれよや
友兵衛情くはぐをでも貴尾ようくを解ぐはをいとくをどるあぐ、

つて房付うねりよりも肉厚く成くまとほして根とゆハふとくもく有ちぐりかくとも有
り紙に包て長くもしてたさるし煙草の如と毒多くの口伝り異まりはなしさいつと
もせあくりの有者有抜すく彩ひりり出くるけりり出てハかさるるくいかそ代は者抜と
ある所の代もなてハあるとれく婦の結ハあの所よりハ抜くはるハ有るくとかて意所一
遠くても新付もるかさごるくなバ月形有のくり中て徒もひとなさてハ抜かく
の足ばりそけるく人も有結のり茶たるもあ我ひるてもこひ付く時ハ絆よりお
の形ちやいとん女房名人の世帯メとれ後くとを足もあり接煙のよい方ともあけと
どと家考るかとまてで去秋を味りとうちもとやで女まこひ付るれハたと人年長で好
キのまいでも結るりて一ゑも別名も長の合つけてとてやもとるゑ足もとるて
ちひ付有べと表やう姫くなても表の結まるとまて性る堅い有りけれ付友に
でハ表てるつまいとかく是を好まるれいお毒くなりやくとるあるる教時ものの様
さまよ豆腐の者で猶ホの一重ばりもとそ例の痛ひば出かくつと寝ととと二人治

あて肉ハあそハみもどりもさるも付りやくとあちるてちひ付下徒よハすのれお孤灯
とるもさなてるるるかいとあるるよあるまはせるホもるまなりるるれ場の例の宿泊ホとるる
冨市とやるりてやくとあるあるり結るるとそ治のとやるるの町の茶屋徒られ
ばまるるるて大あるとハるるるるもるくれて人まとハ場後ホの茶徒出の月お抜ハ足
ハみ結りてるで近付まるせるとるての大治遠うるてかるる行地の結るくるとるとに
遠出てまハ近所西月ホとりと新をるくるんまハやるるり秋ホあるのまハ代の古るるホ
男ハるるとまるるるるて全て実ハ遠ハてハかるる後ホ付合とホあるるるるるるるる
てハ後ホ私なるホりの戻りまちるるとまるホ足ハ高のまるとるるる足方の抜んでるるるやるる
でるるハ内るまとハ同じ坐敷の付合抜ハ犯るる何下さるるるるる抜まハ近付まるる
ハかるるく市まるでも彩破をハまるて二階まる結せ坐ハるるるるるるるるるるる
てるる体ホるれのせるあるるる会結るて家ハるるるるるるあるるるるれハある拘釈方るるる
粹でるるく一重とて後るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

あのうて窮屈がるを見てとりて抜出て後ハ楽々と雅言さればおらだ跡り役者を丈
お意の手にかやつくと二十歳に過し頃ハ和山のうへん荻野八重桐などの様な女形の
若衆さ見ハ紫帽子にて色を出しうる年ごの身されども真に意藝要者の輝
捻ひに覚えるもうろうで稀も開ける酒の上流石ハ云思えそ覚えが病ひて出
理に色めどもあ々に酔ハれしろえも老功者をびてハ為まてもそれぞよとて終にハ
因果て家ての輝ざけあつちかくにかけて自者と実付うけられて覚悟る余
面あがらるゝ見て逃ても逃て役を取しらハ女形の腹甲程云ておりけら此の若衆の
ふハどうへやう稀には乗つて病身を余念されども碎斜に乗えうけく八重桐が為る
若やまを一さんハ灯をけ消ての後ハ役が見てくれのも為けまでに口を吸込さ待ける
八重さとてやさかげ出て女形の入歯一枚ハ覚えがりよ歯の口を抜まてハ嘘が聞て
も京うるも故郷へ姿の大さにも彼あるのほ代文も二階からくそうろくありて
燭さがごさゆゝにまゝごとすの毎さが跡りてほ代の手まへ云やさやう新艘一人婚

よやつて傍に引付並てをまかうの大酒をふく夜明おとしハとゞまる明烏の
いとそこを焼きさを乗て屏風引出て一楽入が昭覚で見てすまぬバ時の月覚悟
宵月の人ハ一人もあらじて此ハ逆入酒飲で帰しが戻つてかくうつくしく夕べの事をふりのき
八重桐が枕元の手をと見て見けかへりさ衣で為に見んとあくこ場を洗くる
おて止めさハ今く彼が働きえんとて猶井にな生きての嫉さまじ続よ八重
若衆とど全く系病の後ハさらにほえ東念せしとやよまのくさあまにハ紫れ同ゑの
うれしとて入歯の口を吸付ける紀よ伊丹酒の薦かぶり一弦とく並て此の変流て液ぶや
の辛さをたのみてかすかにも悔ふ親らがりかくハいられぬ乱がくまちのうな生我
病ひハまへり之続よハ気病様抜きとむべさ我逝泣にあがくとよかく彼へくれ
よとの事をさ一乳事うるを交ゆてさ中とつく入ぬまで八重桐も狩を淡る糸中
乳のひゆるもありきむつ乳そて禅追しても交ざるをそう首てハ此方大によう気短毒に
以てよ為るさがハしやうもござるにもつれがどくやつうり咽にてりの人役に立たる

しく被没者を振舞ひとて合点かてゆきて茶代の礼はなさうぬるがこまる
多用三文又は四の紙を添て礼をまこうとすれハつりあいとろく多用でこざりまするこ
ろぬもこの彼の若足いたく吸入旦那の咳なさるとかくやされ
ましうとうの辛うとうとんと合点せこど女郎ハ者晩寝るなれはさのあるこの様よ
初ての客くうの被のうの又減でも立てっうくひるさんはさ礼と笑ひくりかへてハ
客礼を一度ッこでのあるされてかうの座せてて海ぬるが間迄て右今大盃ようち
鯛よ付て添ハ近ハ四月ぬくしひ様ハ荻神氏のを義の働かて若男色場ハ様ハこさる
あこを様ようり女をろ尻ようとひ義を学ハ中ハ足今くを女郎の裏ようてあるくとうえ
ひと高の勧めこて祝方の如紙を足ハ又接ぶく彼彼足を合不使よ春ハ高足又ハ
るこくる多用三文又若てしひ宝ハ待くてつ花くうくくと接ぶてこうとハ丁寧あ
くうとてそれくくを女郎を義礼がつうくとて接技焼と笑ろて時花り
しとりこ

三　男し勝女一足獅子奥底ハこと実情こ心

足ものの妙ある病を者こくくこ病ひとハさるくこ宵拍ハて出を来郎ハてあくこ様をる
若よ酒ものひとハとて花の純とおくよ
とて小男ろくくこ男小ていまくこ雅ようこ久張とて様よ自然ぶくもひ好色人せれ
付て変がくくよく風ものを浄瑠璃をぬこ本で女よれ人のくとうちも雅ハよ変ぶ人
て絡ハ仕似をてる四色を片付て動ぬ小ものを拍色ひもこ女よ
縁の源さとこひいよく浄瑠璃ハ様を人をとるもとって紙ぶ付ようともあく様変
とて様を知りてくくを中ハもこ紙ぶを彩花の女郎ようを手てれよ幸くこ年の時
ハ女房ようをくくとてれるこハて近所のくれもいくとあくお借屋の井戸端ハ
もこ様ようの同ハつくをつ朝夕の様ハ時ようを様ハ時ようを様ハ中ハてこのみらくるくこ
ともこハ中とぬ様のくくこて変年のこくめみて浄瑠璃を様変の小ものを拍ものを田

今に多くハ遠くて纔ハ二三里より四五里の延しにして四季に帰らるゝハ十里餘も出て
若狭の方丹波路より廿日目ぶりて帰り道すがら郷の噂も疎々しくなれども
留守も女房のかいがいしさに育者あるゆゑで夫まゝの世帯半分も暇入ハ部屋取も
出ては絶けても来る出小荷も来てかくの欲ハ皆さんの心とめて家業に精
多く仕入ても満作にも浄瑠理で押付がむじと女房ハめくよりの肯の一気
も志をよそろくほどて近所で縫ひもよへハ~ぬのめく留守てハ日々でも今でハ
商売まくの手心あてさへわくバしみじみとしてもやすみ家業さへすれハ止めねバ家内
でもよく仕入してとろふても家ハ留守よつて半年の縫りもかくるも忘れぬとて
名残惜さも遠かにして前ひの事をバいさぎよく仕くる私よ契り大坂へ下
り二三日逗留ても帰り下りの序を求めて安心に十月も猶よ契りの出来さ
絹よ辛抱さひとろ事との手本や気遣ひ斗それからハ絶て音信も留守にしか共
それ一度立ても沙汰も遠留る中女房甲斐しさを委もとれども女の身

とくまかいくれも不自由な所りよ二年もまてまでも夫との便りも海ぞの事なれ
バどふぞ郷所を返て楽隠居の身にしても程く櫻の東へぬぞ見へし家業ハよ
とて世帯出て多くあれかも只女とするもつて中々思ひ只の悲しかりてと悩みて
持合て医者もなく三度近く在ても音もおけまバ思ひ付き女の神の縁の
も陰所にて気もよって一家浪人夜逃の浪人も勝手まだ无分別なる方ととある人
の云様ハ草子も今と女の一気でこそすまぬ身さそでやと嫁もふく遂るを承知と療
をて倫おの金を出づ寄てこれハ手前を拝見て大坂からの船の世話の杰へくと
付て三百里計の所迄て悟とらひとらを力に諸神諸仏へ祈ひをかけくらし
て遂ふさハ潔斎まそと隠ぐ一気まて良人へ契りよ若ハ若くが所ちまで
へ恨付て費ふさを役斗夫の事ハ恐ても忘れども是れ皆ハ大分ある斗れ
て私付しかも悩くて是恨付て費ずさる衣で立別れてくと泣涙おふ安から八
安積不ろも是わぢ迄がつて彼是とお待ち迄てくれても有夫の功果を知てもそれ

四之巻
いてきまーす
母かとういてかいで
京のおかんけーのうんせんしーや
ハすこうんげえうる
都右文乃中

四之巻
都右文
出さんしー
喜蔵
ちてといつ
福氣をさまくなやむ

ろして彫刻師さかうたるものの秋の日をうけ浮屠ハ角の瓶屋屋の
金山ゝゝの女帝とゝ高師てまぶ知れて迷て山長崎を立て大坂の方(のわり)と
の傳受ハ実行者ゝさ拍子さ悪るも水瓶を責てかゝゝて乃ち抑付て結め表み
過て世信の母さての大勢さ三ゝ大勢の母をひをゝも意意さゝが付て世信を拵て女の遠
ぐ居りふゞ方も頃るゝ頃ゝ頃ゝ頃ゝて乃ち母と付変て九出て病様なゝ乃ちゝ
まで乃ち動師さとゝ方ゝ遊流をたゝ山師ゝさとゝて古ゝ頃りまで乃ち頃ゝ乃ち頃ゝ乃ち頃ゝ
出乃ものゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝの乃ちゝ合ゝて角の瓶屋屋ゝゝ長く世信ゝて乃ちの拵付て山師
ゝゝハ付師て二年切て我乃を三十九ゝ乃ち雲ての勢なゝ乃ち乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ
のゝさゝりも拵乃ゝの女帝ゝ長崎の瓶屋屋ゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ
こゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ
一月もおかゝゝ絵本ゝゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ
どゝれゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ

でゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ
ゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ乃ちゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

弱たる猫に一ッ噛ませ其ゝ飾らせてむかしに垣て見る事なれバ身動きもならぬく丹
させぜど夜に風呂を涌させ垣て見るのか立ても立なく湯治とハ清ふせ底塞
に致もこの時湯上りに手園中に入浴身さ綾服子かごでねむく中に御本復
成をさせ新にも夜目をかけさせて秋新に息のかゝるやを嫌ひて深に禁ま猫の
あんくわのを見るがごとく過て一ッ夜衣に入て寝るやとうん近所寺中も猫好なる者で白
の毛びろうどめて足を猫へかせるとやんして庭猫のごとく人と我も髪ひて絶
ふたハむ髭が始ハ忘れ居て膝迄かりかゝでもなくハ鼠も無く弱重なる浴めを
ひとて出く姿りとの薬をなひもやず古く猫迄く庇の夢を守につけてもみな
まともとなり大破じやうらしの古をとあけひ出に大んとぞすく人每に不便なる
とひなせがいつの頃より死亡ひ弱に病ひと成て始終に獅子の縁なるをとおや
蒲団の上に居て薬猫の飛古回おの所ぞ家内打寄猫子の平生をなく其迄
くしぬる中にも十経まより好き人とて思ひを寄せぬるバいられ必く静

はりぬれるとも居もなく入もならをうてかけ出るの足を見るくされども猫ハ
利ど柿じ葉ハ何ふてござるぞと医師に云ハ薬獅子の子を求る時薬へ落て舞ふ上
らぬ猫子の猫子の黒焼と申て猫子の病ひに獅子の黒焼ハどうしても効きよからぬ
ものにて其猫ハ鬼ひざりござる黒焼の精力かや強く有てより強めぐる汁にもあるれ
兎角薬ハいずれも及バぬと名人とも鼻を掻むり噛つきて藪医ハ見むくと逃まつるた
地獄の病ひにさまかこなり上方若者の猫子病ひ一功の内のこなり古今唯にて有
たがるハ光済とて京近所の有て若好みの療治にかゝつて術さがりが二三ヶ月も長生
のうち彼病ひの記しぬるに大坂へ送りて一家内の者共救まりていふこもし女の
手に縛て送られ猫して居んずをとても出女共の行路をとゞめてや大坂の堀江より
新町と申しにつきあれるも実に近所の谷地十本被急に出て鼻をかみ
女郎衆の宮じりのうらさ実にて性よき女を病ひ舞発せさせんとて居らく
賑せしくありし昔坂なる廻の咄し

四之巻終

忠之巴終